



透明受胎  
佐野 洋

— 日本SFシリーズ6

早川書房

佐野 洋

透明受胎

著 者 略 歴

本名 丸山一郎 昭和3年5月東京に生る

昭和28年東京大学心理学科卒

探偵小説作家

現住所 東京都大田区市之倉227

主著書

「完全試合」(光文社刊)

「第六実験室」(早川書房刊)

「死んだ時間」(講談社刊)

「華麗な醜聞」(光文社刊)他多数あり

検 印  
廃 止

透 明 受 胎

定価 三三〇円

日本SFシリーズ

〈6〉

昭和四〇年一〇月一五日 初版発行  
昭和四〇年一月一五日 再版発行

著 者 佐 野 洋

発行者 早 川 清

印刷者 菊 島 英 治

発行所 早 川 書 房

東京都千代田区神田多町二二二  
電話 東京(二五四)一五五一〜八

用紙・四国製紙KK/クロス・東洋クロ  
スKK/印刷・KK広英印刷/製本・堅省堂

透  
明  
受  
胎



## 第一章

### 1

それは、どこか遠いところから響いて来るようだった。波、しかも荒れた海の波である。激しく怒るように砂浜を叩きつけ、退くとすぐに、また押し寄せて来る。——そんな種類の音を、津島は聞いていた。いや、正確には感じていたというべきかもしれない。闇の中に、海の怒りだけがあつた。

だが、やがて、その海は消え、暗闇も消えて行つた。白っぽいものが、目の前にちらつく。

「あ、ああ……」

と、津島は声を出した。紅い花が、彼の視野の最も近いところで、かすかに動いた。

「お気づきになりました?」

紅い花だと思つたのは、女の口紅だった。津島の顔を、二十五、六の女が、心配そうにのぞきこんでいる。

津島は、ゆっくりと頭を回転させた。痛みと言つた、顕著な徴候は、からだのどの部分にもな

い。だが、四、五百メートル泳いだあとのように、全身がけだるかった。自分は、あの荒れた海で泳いでいたところを、助けられたのか？ 津島の意識に、そんな考えが浮んで消えた。

そこは、病院らしかった。白衣を着て、白いマスクを掛けた男が、

「何本に見えますか？」

と、人さし指を立てて、彼の目の前に突き出した。

「一本ですが……」

「じゃあ、こんどは？」

「二本です」

津島は、やっと、自分が置かれている立場がわかった。

医者とは、そのあと、小さな懐中電灯を、左右に動かして、それを目で追わせたり、瞳孔をのぞきこんだりした。

「どこか痛みは？ 頭のどこかが重かったり、吐き気がしたりしませんか？」

「そうですわね……」

津島は毛布の下から手を出し、動かしてみた。脚の屈伸も、ベッドに横たわったまま試みた。

「別に、痛いところはありません。さっき、頭の中で、波のような音を聞いたようだけれど……」

「波ですか？」

「ええ、しかし、今はしません。ただ、全身がひどくだるいのですが……」

「じゃあ、ちょっと、上半身を起してみて下さい」

全身の疲労感にもかかわらず、ほとんど努力らしい努力なしで、津島はそれができた。

看護婦が、素早い動作で、彼の背に枕を当てがってくれた。看護婦には、かすかな腋臭があった。

「どうですか？」

と、医者が聞いた。

「別に……。しかし、わたしは……」

どうして、ここにいるのか？ 何が起ったのか？ 津島は、そのところだけが、わからなかった。

そして、医者と看護婦のほかに、先刻からベッドの脇に立っている、若い女の存在も不思議だった。彼女は、津島の記憶の中にある女性ではなかった。

「あのう……」

女は、津島の視線に気づいたのか、話しかけようとした。おとなしいベージュ色のスーツの左胸に、金色のアクセサリーがついている。それは、かぶと虫を型どったもののようだった。化粧は、あまり派手ではないが、アイラインは入れていた。日本人としては、彫りの深い容貌と言えるだろう。ことに、鼻の形が、かわいかった。

「いや、ちょっとお待ち下さい。先に警察の人が……」

医者が、口を開きかかった女を止めた。

「でも、おわびだけでも……」

「まあ、それは、あとでゆっくり」

医者は、邪険とも言える手つきで、女を部屋の隅に押しやった。

看護婦がドアを開け、二人の制服警察官を室内に導いて来た。

「おからだの具合の悪いところ、すみませんが、麹町署の交通係です」  
なるほど、警察官は、緑と白の腕章を巻いていた。

「ははあ……、すると、わたしは、交通事故に遇ったのですか？」

「え？　じゃあ、覚えていらっしゃらないのですか？」

津島の反問は、警官を驚かしたらしい。彼は同僚の顔を見、ついで、医者に視線を移した。医者は、黙って、首をひねって見せた。

「わたしは、本当のところ、自分がなぜ、病院にいるかもわからないのです……」

「ふうん……。じゃあ、お名前は？　名前を忘れてはいないでしょうな？」

警官は、津島の言葉に疑いを持っているのか、粘りつくような口調で聞いた。

「まさか……。姓名は、津島亮。霞町の大和田マンションに住み、職業は著述業です」

「じゃあ……、作家の津島さんですか……」

「いや、正確には作家じゃありません。小説は書いていないから……」

最近の呼び方によると、ルポ・ライターということになるのかもしれないが、自分の職業を、わざわざ横文字で言う必要もないと、津島は考えていた。それに、週刊誌向きの、際物はなるたけ書かない方針だったから、いわゆるルポ・ライターとも、多少は違うのだという、自負じみたものも持っている。と言って、作家といわれることは、なお嫌いだ。日本では、作家と称した方が、何かと都合らしいのだが、それだけに、物欲しげな呼称のような気がするのだ。

「たしか『戦後迷宮事件の記録』という本をお出しになっていましたね。拝読しましたよ」

警官は、お世辞のつもりか、そんなことを言った。

それは、三カ月前に津島が出版した著書であった。いわゆる迷宮事件と言われるものを、実際に自分の足で調べ、関係者の話なども聞いて、まとめたものであった。彼自身の推理を加えた箇所もあるし、捜査方針について批判した部分もあった。出版当時は、新聞の書評などでも取り上げられ、ベスト・セラーの表にも、一、二度は名前がのった。彼自身としても、比較的气に入った仕事だった。

「しかし、あの本についていたお写真で見ると、津島さんは、もっとお若い……、いや、失礼ですが、年齢は？」

「四十二歳です」

彼がそう答えたとき、たしかに、病院内に、一種の奇妙な空気が流れたようだった。それを、津島は感じる事ができた。白衣をまとった医師、看護婦、身元不明の女、そして、警官たちでさえ、ある特殊な反応をしたのである。ただ、その反応の意味がわからず、津島の神経はいらだった。

「何か？」

「いや……」

と、警官は困惑したように、医者顔を見た。

「津島さん。失礼だが、あなたは、髪の色は？」

「え？ 髪？ 頭のですか……」

「ええ、髪の毛の色は……」

「むろん、黒ですよ、日本人ですから……。それとも何か？」

言いかけて途中で、津島は軽い狼狽を感じた。そこにいる五人が、みな、気味悪げに、彼の頭髪に視線をやっていたのだ。

「すみません、鏡を……」

と、津島は叫んだ。自分の頭髮に何らかの変化があったのは、たしかであろう……。

看護婦が、医者に相談する目を向けた。医者は、一、二秒眉をひそめ、考えこむ風だったが、「いいでしょう……。見せて悪い理由もない」

と、消極的な許可を与えた。

「あのう、鏡でしたら、あたくしが……」

先刻から、黙って、この場のやりとりを眺めていた女が、あわてたような手つきで、ハンド・バッグを開け、小さな手鏡を津島に渡した。

「どうもすみません……」

それを受けとるとき、かすかに、タブーの匂いがした。尤も、正確には、それがタブーかどうかはわからない。結婚後二年半で死んだ妻が、ときおり、タブーを用いていたせいか、津島の鼻には、香水の匂いはすべてタブーのように感じられるのだったから……。

津島は、しかし、すぐに自分の顔を鏡に写そうとはしなかった。予感めいたものがあって、躊躇したのだった。心の準備が必要であった。

芝居じみているとは思ったが、彼は目を閉じた。そして、鏡を顔の前に持って来てから、おも

むろに開いてみた。自然に、脈搏が早くなっていた。

「あっ」

心の隅では、何らかの異常を予期し、何が起きていても、驚くまいと思っていたのだが、小さな叫びが洩れるのは防げなかった。

「いったい、これが自分の顔なのか？　もし、津島が女であつたら、この瞬間に失神するか、発狂するかしたであらう……。」

鏡に写っている彼は、一度に、二十歳ぐらい齡をとっていた。

眼尻には、何本もの皺ができ、頬にどす黒い老人性斑痕さえ生じている。さらに、決定的なのは、頭髮であつた。それは、むしろ見事なまでに、真白になっていた。

「いったい、これは……」

津島は、救いを求めるような気持で、医者顔を見た。

医者は、首をかしげて、津島の視線を避けた。

## 2

「津島先生」

と、警官が言った。さっきまでは、『津島さん』だったのが、『先生』に変わったのは、或いは、津島の余りの驚愕を見て、同情したのかもしれない。

「お疲れでしょうが、一応事情だけは、お聞かせ願います」

「ええ、そりゃ構いませんが、事情と言っても、わたしは何もわからないのですよ」

「では、きょうの二時ごろ、国会議事堂のそばを歩いていらっしゃったことは？　それは覚えておいででしょうか？」

「国会？　ああ、そうでした。たしかに、わたしは、あの付近に行きました。知り合いの新聞記者に、あすこの記者会館で会うことになっていたので——」

約束の時刻は二時だった。しかし、一時に赤坂のホテルに立ち寄る用があったので、それを済ませてから、散歩がてら、歩いて国会議事堂付近まで行ったのだった。

だが、その記憶が、いま警官に言われるまで、蘇ってこなかったのは、なぜであろう。そしてさらに、その後何をしたのかの記憶もなかった。

新聞記者には会ったのだろうか？

「あなたは、そこで事故に遇ったのですよ」

警官は、手帳を開いた。

「事故？　それでは、どこかを？」

津島は、改めて、五体のすみずみに、神経をくばってみた。しかし、表現しにくい疲労感のほかは、痛みのような自覚症状はなかった。

「周囲の事情とか、目撃者の言葉などから判断すると、あなたは、ちょうど、国会議事堂脇の歩道から、反対側へ行こうとして、道路を横断しかけた。横断歩道ではないのですが、あなたは、何か考えごとをしていらっしゃったらしい……。そこへ、時速四十五キロぐらいで走って来たの

が、このご婦人、田部佳代さん運転のブルー・バードです」

——田部佳代は、津島が歩道に立ち、腕を組んでいるのは認めていた。しかし、そこから急に車道へ飛び出るとは思わなかったので、別にスピードも落さずに、通過しようとした。

「あっと思い、あわててブレーキを踏んだのですが、もう間に合う距離ではありませんでしたわ。十メートル近く行き過ぎてしまいました」

田部佳代は、津島の機嫌を損ねまいとするかのように、表情をうかがいながら話していた。ただ、濃い目の口紅ではっきりと限どられた唇だけは、物怖じをせずに、あざやかに動いた。発音の明瞭なのが、津島の耳には快かった。

「すると、わたしは、そのとき撓ねられたわけですか？」

「はあ、そうではないかと……」

佳代の返事は、急に、頼りなげになった。

「え？ とおっしゃると？」

「急ブレーキで車がとまったとき、あたくしは別に、人をひっかけたというような、手応えらしいものを感じなかったんですの。それで、あ、では、あの男の人は無事にかわしてくれたのかと思って、あたりを見回しますと、歩道の、さっきその方が立っていた付近に、倒れている方がいます。じゃあ、やっぱりと思って、あたくし、車から降りて、かけつけました」

——田部佳代は、その男、つまり津島を見た瞬間、彼のどこからも血が流れていないので、安心したようだ。だが、声をかけても、津島は気づかなかった。顔色も土のように青かった。もう死んでしまったのか？ 佳代はすっかり混乱して、どう処置すべきか、途方にくれていた。

やがて通りがかりの車も、この光景に気づき、タクシーの運転手が、救急車を呼んでくれたのだという。

「ところが、現場を調べてみると、そのような事故があったとは思われたいのです」

警官が、打明け話をするときのように、声を低めて言った。

「例えば、タイヤのスリップのあとですが、これはたしかについているし、この田部さんのおっしゃる状況に合致します。しかし、車体のどこにも、そのような人身事故があったという形跡がないのですよ」

「車体に形跡が残らないことも、たまには、あるのじゃないですか？」

自動車が人体をはねたような場合、ボンネットの一部が凹んだり、塗料がはげたりすることは、津島も知っていた。ときには、はねられた人間の毛髪が付着することもあるという。

「さあ……」

と、警官は首をかしげた。「すくなくとも、今までの例では、程度の差こそあれ、必ず証拠が残っていますよ」

「それに……」

今度は、医者が口を挟んだ。「あなたが、かつぎこまれたのは、二時十分でした。すぐに傷を調べたが、どこにも打撲傷はないし、内出血の徴候も見当らない。擦過傷、つまりかすり傷ですね。それさえないですよ。ただ、失神していることは確実なので、脳の検査は慎重にしました。結果は異常なしです。脈搏が多少、弱いようでしたが、いわゆる失神状態にあっては、当然ですから……」

「はあ、変ですねえ」

津島はそう言ったが、その奇妙な事態が、自分の上に起きたという現実感はなかった。彼とは無関係な、他人の経験談を聞かされている気持だった。

「つまり、現在において、はっきりわかっているのは、津島さんが、歩道の脇で失神していたという事実と、その付近に、田部さんのブルー・バードのタイヤのスリップ跡があったということだけなのです」

「なるほど、交通事故があったという田部さんの供述はあっても、物的証拠や、他の状況証拠がないため、田部さんの供述をどう扱ってよいか困っていらっしゃる。そういうわけなのですね？」

「そうです。しかし、津島さんが、たしかに自分は撓ねられたと言えば、一応は、事故があったものとして、事件を処理しなければならぬし……」

「いや、さっきも申し上げたように、わたしには、そんな記憶はありませんよ」

津島は、わざと、つき放したような答え方をした。

「これはやはり、田部さんの錯覚じゃないですかね？」

警官は、手帳をしまいながら、田部佳代に言った。彼は、交通事故としての扱いをしないことに、秘かに決めたようであった。

「錯覚？ あたくしの目の間違いだとおっしゃるのですの？」

「まあね。そうとしか考えられないじゃないですか……。つまり、実際には、津島さんは歩道から車道には飛び出さず、何らかの理由で失神した。ところが、たまたま車で通りかかった田部さ

んは、それを自分のはねたと思い……、だってそうでしょう？　あなた自身、車に何の手応えもなかったと言っている」

「でも、そんな錯覚って、あるものなのでしょうか？」

「まあ、ないことはないでしょうね」

と、医者と言った。「そういう方面は、わたしはよく知らんが、自動車にはねられながら、どこにも外傷がないというのより、錯覚説の方を信じますな」

「それでは……」

警官は、津島に目礼した。「これで一応、引き上げます。ただ、もしあとで、どこかが具合悪いということにでもなったら、わたしのところへ来て下さい」

「しかし……」

津島は、再び手鏡に顔を写してみた。白髪や顔の皺は、依然として、そこにあった。

「わたしは、なぜ、一度に年齢をとってしまったのだろう？　からだのどこにも痛みはないが、これだけは、たしかに変化と言えるものなのだが……。車にはねられて、そういう変化を起すという例は？」

「さあ、わたしの知っている限りでは、ありません」

医者は、首をふった。それは津島には、妙に冷淡な態度に見えた。

警官も、ちょっと足を止めかかったが、そのまま、部屋を出て行ってしまった。

明らかに、彼らは、津島の言葉を信じていないのである。顔の皮膚には、もっと光沢があったし、頭髮も黒かったと、津島が言ったところで、少なくとも、現在、ここには証拠がない。彼ら